

極めし者たちのディープなはなし

松戸市特別編

ア:ちばやし



根本一夫
いちじく農家

林優衣
はちめもわる／パティシエ

小幡祐亮
ブルーベリー農家

小幡あゆ美
ブルーベリー農家

藤田波枝
いちじく農家

窓からは風にそよぐブルーベリー畑が見え、店内には採れたばかりの新鮮な野菜やフルーツ、そしてお菓子が賑やかに並び、まるでマルシェのようなカフェで丁寧に淹れられたコーヒーを楽しんでいると、入口から明るい声が聞こえてきた。

何かを始める理由は十人十色

根本「どう？ ケーキ売れてる？」

林「おかげさまで。あついちじく持ってきてくれたんですね」

小幡祐「お久しぶり！ ちょっと休んでいけば？」

藤田「ここでゆっくりお茶するの、もしかして初めてかも。なんかずっと忙しくて」

小幡あ「みんなが揃って最近なかったから、嬉しい。この店つくって良かったよ」

根本「そうだね。いちじく農園始めた頃は、まさかこんな風にみんなで何ができるなんて思ってもみなかったなあ」

小幡祐「うちのブルーベリーと根本さんのいちじく、始めたの同じ頃だったよね」

根本「当時はまだ面識なくて、しばらくして観光協会の集まりで知り合ったんだよね？」

小幡祐「お互い松戸ではあまりつくられていない果樹をやってて、しかもサラリーマン出身という共通点もあったし、いわゆる『新参者』という意味でも同じだったから何か親近感あったね」

小幡あ「私は夫がブルーベリーを始めたタイミングで結婚したから、その頃は右も左もわからなかったなあ」

小幡祐「根本さん、前職は確かホテルのシェフだったでしょ？ どうしていちじく農家に？」

FRIENDLY TALK



DACHIBANASHI

根本「定年後の人生を考えてね…。腰を曲げる作業はキツイけど、いちじくなら立って作業ができるかなって（笑）」

小幡祐「僕も同じ！ うちには江戸時代から野菜をつくってる農家だけど、フルーツやりたいと考えた時、ブルーベリーなら立ってそのまま収穫できていいなって思ったんですよ（笑）」

藤田「でもいちじくも意外に腰を曲げる仕事があって、結局大変だったんだよね（笑）」

根本「私がいちじく農園を始めると言い出した時は家族全員に反対されてね。退職金もみんないちじくにつき込んだし」

藤田「もう！ お父さんは！」ってお母さん怒ってたよ。私も「もうお父さんのことは、ほっとけば？」とか言ってた。でも産休のタイミングで農園の仕事を手伝うようになって」

根本「最初はケンカばかりだったね」

藤田「でも、お父さんが一生懸命やっていたから、私もがんばらなきゃって。ケンカしながらもう6年だよ（笑）」

小幡あ「優衣ちゃんが農業ボランティアでブルーベリー農園に来てくれたのは、3〜4年前だったっけ？」

林「そうそう。あれが私にとって初めての農業ボランティアだった。あの時出会ったブルーベリーの味に感動して、パティシエとして他にもおいしい素材を見つけたと思って。それからしばらく全国各地を農業ボランティアで回ったんだよね」

農業を始める条件が「腰を曲げないでいいもの」という発想が何とも面白い。人が何かを始める理由は十人十色。未来は何も決まっていなくてもいいから、自分なりの

ちょっと特別なこだわりを大切にしながら進んでみるのがちょうどいい。

お菓子が繋いだ深い絆

林「松戸に来て小幡さんのブルーベリーや根本さんのいちじくを食べて、「こんなに美味しいものがあるんだ！」って思ったのがきっかけで、農家さんと繋がる」というコンセプトが明確にできたんだよね」

小幡あ「当時の優衣ちゃんはレンタルキッチンでお菓子つくって、マルシェやネットで売ってたよね」

林「そう。そのあと根本さんの加工場を使わせてもらえるようになって」

藤田「昼間はうちが使ってるから、優衣ちゃんには夜に作業してたんだよね」

根本「夜中に散歩してた人が、『何で甘くていい匂いにするの？』って驚いてたよ（笑）」

藤田「車で寝たこともあったよね？」

林「夏は暑いから、車の窓開けて寝て。そしたら蚊にめっちゃ刺されて（笑）。結構サバイバルだった。でも、波枝さんとあゆ美さんは子育てしながら働いてて、本当にすごいな」

小幡あ「結婚するまで農業には無縁だったから、不安になって『農家に嫁ぐ』とかウェブで検索してみたりして（笑）。でも、今は子育てをしながら仕事ができる環境っていいなと思うてる。夫の両親のおかげが大きいかな」

藤田「農業は大変さもあるけど、喜びや楽しさもあるよね。ご年配の方がいちじくを懐かしがって、『完熟の甘いのが食べられて良かった』と喜んでくれた時は嬉しかったなあ」